九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ニコライ・サゾーノフ考 : ボードレールの紹介を中心に

池田, 和彦
明治大学

https://doi.org/10.15017/16052

出版情報：Comparatio. 10, pp.33-54, 2006-11-20. 九州大学大学院比較社会文化学府比較文化研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ニコライ・サゾーノフ考

——ボードレールの紹介を中心に——

池田和彦

本稿でとりあげるニコライ・イヴァーノヴィチ・サゾーノフ(1815-1862)は、ゲルツェンのモスクワ大学時代以来の古くからの友人、あるいはロシア人としてП.В.アンネンコフとならぶもっとも初期のマルクスの知人、共鳴者として、19 世紀ロシア思想史の研究者のあいだで多少知られた人物である。ロシアの百科事典や文学事典類にも簡単ではあるが一項が設けられていて、邦訳でもゲルツェンの『過去と思索』やバクーニンの『告白』、E.H.カーの『浪漫的亡命者』などにその名が登場してくる。まったく無名の存在ではないが、彼が政治的な活動だけでなくゲルツェンやツルゲーネフなどと並ぶ当時第一級の西欧通、文学通で、1850 年代後半西欧の文学、思想の紹介者として先駆的な活動を行っていたことは、今日まで一握りの研究者のあいだを除きほとんど知られていない。

筆者が西欧文学の紹介者としての彼の存在を知ったのは、かつてフロベールやフランスのレアリスムがロシアにどのように紹介されていたか調査したさい、1857 年の『祖国雑記』のなかで西欧の芸術動向に出色に詳しい記事と出会ったのがきっかけだった。K.シュターヘル（К.Штахел）との署名があり、いち早くフランスでの『ボヴァリー夫人』の反響や『ボヴァリー』裁判について報じていた。[1]のちにシュターヘルがサゾーノフのペン・ネームであること、1830 年代末からパリを中心に終生西欧に滞在し、『悪の華』の献呈リストにも名を連ねたボードレールの知人で、フランスの詩人、文学者とのつきあいの多かったことを知った。そして彼の一連の紹介記事や論文を読み、またごく早い時期のマルクスの共鳴者であることなどを知るにつれて、[2]サゾーノフがはたして『過去と思索』に描かれたような軽薄な人物であったか、疑問を感じるようになった。けれどもなかば忘れられた亡命者ということもあって彼にかんする文献に乏しく、彼がさまざまな新聞、雑誌に書いたものがまとまった本の形で刊行されていないこともあって、正確な人物像をつかみかねていた。[3]しかし、1996

---

[1] 「ロシアにおけるフロベール概観(1857-1870)——『白痴』における『ボヴァリー夫人』・序」、『RUSISTIKA』第 7 号、1990、55—77 頁。

[2] この点については下記を参照。

Д.Рязанов, *Карл Маркс и русские люди сороковых годов,* Птр., 1918, cc.28-56.

[3] サゾーノフの書いたものを多少まとめて彼を紹介したものとしては、『文学遺産』第 42 - 43 巻（1941）があり、彼についてのもっともまとまった研究としては、W.シルボフスカの研究がある。いずれも第 4 節でふれる。邦語文献では不正確な記述も含まれるが、『過去と思索』第 5 部「ロシアの影」Ⅰ、Н.И.サゾーノフの節がもっともまとまった紹介である（『過去と思索』金子幸彦、長縄光男訳、第 2 巻、筑摩書房、1991、所収）。

サゾーノフの略歴を簡単に紹介しておく。

1815 年 6 月 29 日リャザン生まれ。モスクワ大学に入学し、ゲルツェンを中心とするサー

年出版されたA.ワナーの『ロシアにおけるボードレール』や2002年に刊行された『ボードレール事典』でもサゾーノフのことがあまり知られていないことを知り、[4]不十分ながら彼の文化面での仕事について多少報告してみる気持になった。本稿ではそのなかでもとくに興味深いボードレール紹介の記事を中心に、1856年前後の彼のジャーナリズムでの活動や文学観について見ていきたい。

(一)　『祖国雑記』におけるボードレール紹介

サゾーノフとボードレールが知りあったのは、1840年代後半のボードレールの『海賊・悪魔』紙寄稿時代と推測されているが、[5]ボードレール側の記録にサゾーノフの名が最初に現れるのは、1857年3月7日付ミシェル・レヴィ宛手紙中『続・異常な物語集』の献呈先の一人としてである。以後、同年六月『悪の華』の献呈リストに載せられたほか、1864年4月の手紙まで6回ほど手紙のなかで名前が言及されている。[6]サゾーノフは1860年の後半ないし1861年にパリからスイスに移り住み、そこで亡くなったので、ボードレールとの直接のつき合いはそのころまでと考えられる。

サゾーノフは1856年から57年にかけて『祖国雑記』の西欧通信員として断続的に西欧の文学、思想、学術の紹介記事を書き送っていた。ボードレールについて書いたのは、この一連の通信文の最初にあたる「フランス、イギリス、イタリアの最新詩（『祖国雑記』編集部への手紙）その一」のなかで、冒頭に「1855年12月30日パリ」の日付がある。[7]当時ボードレールは『悪の華』の出版以前、40編ほどの詩や文芸批評、美術批評を発表していたとは

クルに加わってベリンスキイやツルゲーネフ、バクーニンらと交わる。34年にモスクワ大学を卒業してから一年ほど西欧に出て、一度帰国した後、30年代末からおもにパリに移り住む。43年末パリでマルクスと知り合い、1851年ごろには未刊に終わったが『共産党宣言』の初のフランス語訳を試みた（サゾーノフが半分担当したという）。二月革命にも加わり、急進派のジャーナリズム活動を行なう。50年にロシア政府からの帰国命令を拒否してロシアの市民権を失い、亡命者となる。その後、さまざまな出版物でロシアの専制政治を批判し、ポーランドの独立を支持する。パリを去った後のマルクスとも文通し、ロシアが資本主義を回避して直接社会主義を達成できるという考えに達したという。62年11月17日、ジュネーヴで死去。（おもに次の事典による。*The Modern Encyclopedia of Russian and Soviet History*, vol. 33, ed. by J. L. Wiecyzynski, 1983, p. 118.）

[4] Adrian Wanner, *Baudelaire in Russia*, Gainesvill, 1996, p. 11.

A.ワナーは、K.シュターヘルがサゾーノフのペンネームであることに気づいていない。また『ボードレール事典』でも、サゾーノフのロシアでのボードレール紹介がふれられていない。

Claude Pichois, Jean-Paul Avice, *Dictionnaire Baudelaire*, Charente, 2002, pp. 436-437.

[5] Michel Cadot, *L'image de la Russie dans la vie intellectuelle française (1839-1856)*, Paris, 1967, p. 34.

[6] *Baudelaire: Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par C. Pichois et avec la collaboraton de J. Ziegler, vol. 1, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, pp. 379, 407.

（以下、プレイアード版ボードレール書簡集はB. C. と略記する。）B. C. vol. II. p. 358.

[7] *Отечественные записки*, том 104, 1856, №2, отд.5, с.1.

以下、『祖国雑記』の記事の引用頁は本文中に示す。

いえ、世間的にはまだパリの限られた文学者、芸術家だけに知られる存在だった。サゾーノフの文章はロシアで最初の詩人としてのボードレール紹介であるだけでなく、フランス本国を含めてもっとも初期の詩人にたいする批評に属する。この記事にフランスで未発表だった詩<Le Flacon>が載せられたことについては、サゾーノフによる記事であることに気づいていないがすでに前述の A. ワナーの紹介があるので、[8] 本稿ではボードレールの紹介として注目すべき点やサゾーノフの文学観を知るうえで参考になる点を中心にとりあげていきたい。

通信文ではフランス詩の現状を語る前提としてはじめにフランス語の詩語としての特質と中世以来の詩の歴史を概観する。そしてユゴー、ラマルチーヌ、ミュッセ等ロマン主義以降の主要な詩人の現状を報告したのち、もっとも注目すべき若手の叙情詩人の代表者としてフィロクセーヌ・ボワイエ、ボードレール、テオドール・バンヴィル、ピエール・デュポンの名をあげ、この順に紹介していく。ボードレールについては、まず彼が世間的には最近知られるようになったばかりであることを次のように言う。

> つい最近『両世界評論』に詩を発表してヨーロッパ的に名が知られはじめたシャルル・ボードレール氏は、すでに久しい以前からパリの文学界で知られていた。10 年ほど前ほとんど子供のようだった若者は、芸術家や詩人の社会に登場し、魅力的で一種独特な風貌や非凡な才能を約束するいくつかの詩によって注目を集めた。(14 頁)

サゾーノフがすでに 1840 年代半ばからボードレールを知っていたらしいことがわかるが、ついで彼が良家の子弟であること、18 才で旅に出てギリシャ的なタイプの美を理想とすることに慣れてきたパリの人々を瞠目させる美の理解を南国からもち帰り、人々を驚かすのに熱心だったことを語る。

> ボードレールは彼らに黒人や褐色、黄色人種の女性について、さらには彩色したり鼻に輪をはめたりした女性について熱弁をふるったのである。なにごとであれ驚くのが嫌いで好んで無関心や嘲笑を装い自分の動揺を隠すパリの文学者たちは、ボードレールが見たり感じたりしたことをたんに彼らに伝えるだけでなく、彼らを驚かせようとしているのだ、と自分たちやこの若い仲間に断言しはじめた。(中略)もちろん、マレー人や黒人、マデ

---

[8] Adrian Wanner, "Le premier regard russe sur Baudelaire et la publication du 'Flacon'", *Bulletin Baudelairien* 26, no. 2 (December 1991), pp. 43-50.
なお、サゾーノフがこの記事でボードレールの才能を高く評価し、詩を紹介していたことは、W. シリボフスカがすでに次の論文で簡単にふれていた。
Wiktoria Śliwowska, Mikołaj Sazonow, *Slavia Orientalis*, Rocznik XV, 1966, Nr. 3, S. 356.
ほとんど読解力のないポーランド語の論文の内容については、久山宏一氏のご教示を受けた。

ナス人と暮らしてパリに戻ったボードレールは、[9]パリ市民がいくつかの点でひどい未開人よりさらに野蛮だと気づいたのかもしれない。そのため彼らが驚くのが彼には慰めに思えたのだ。(14頁)

つづけてボードレールの人柄や詩人としての才能を次のように述べる。

苛だちやすいまでに感じやすい魂とあらゆる形の驚異、奇怪を好む想像力をもつが、頭脳は実際的で性格は毅然としている——これらすべての特質に加えて、さらに彼が望んだわけではない一人暮らしと家庭生活の不在が、鋭い詩的才能とあいまってボードレールをパリの文学界、芸術界のなかでもっとも独創的な人物にしたにちがいない。(中略) もし、彼の出入りしている環境のなかにもっと詩的な状況があって、詩的天才(**гений**)に豊かな糧を与えることができるなら、彼は偉大な詩人たちがその活動の頂点で到達した高みや独創性に達することができよう。しかし、現在のパリの空気は詩には不向きである。彼は散在するポエジーの断片を探しだし 、自分のうちにそれらをとり入れることができて、この能力と情熱的な探求によって、その詩のうちにおそらくこれまでフランスの詩人が誰一人表現したことがないほど鮮烈に、パリの独特の色彩をもたらすことができたのである。(14-15頁)

そのような詩の例として1855年《*Fontainebleau*》に発表された「朝の薄明」(Le Crépuscule du Matin)を散文の形で露訳し、その都市風景と写真のようなパリの一場面の独創性を希有の価値としてあげている。

さらに、ボードレールが人々を驚かせることに熱心だったことについて、はじめは合理的な計算によるものだったのが習慣化したこと、たとえば、かつて彼がパリにもどって暮らしはじめたころ、シェークスピアは下手な詩人だといい、これにたいしてマチューリンの『放浪者メルモス』を推奨して聞き手を笑う程度だったのが、驚かせる方法がないと頭を剃ってわざと帽子をかぶらずに歩いたりするようになった、と語る。そしてこの人を驚かせるシステムが複雑であることを、次のようなエピソードから言う。

しかし、この驚かせるシステムはとても複雑である。彼はときにパラドクスの形で自分の秘めた考えやしばしば的確な文学的、道徳的寸評を述べる。たとえば、私はかって彼が「美はもしそのうちに奇異なものを含んでいなければ美ではない!」、と言ってある話を結び、周囲の文学者や芸術家をひどくびっくりさせようとしたことを思いだす。それを聞いたあるスラヴ人が平然と、その考えはギリシャ人から借りたものだ、と彼に言った。というのも、ギリシャ人はアフロディーテーを嫉視に描き、マケドニアのアレキサンダーを首

[9] 仮にマデナスと表記して訳した原文のмаденасс が、どこを指したものか不明。

が曲がって頭が左に傾いているので美しいと見たからだ。この罪のない指摘は、ボードレールがフィディアース、セヴィニェ夫人、クーザン氏の三語を並べたよく知られた罵言を使うわけにいかなかったため、いっそう彼を忌々しく思わせたのだった。ギリシャ芸術の厳格な端正さの代表者として、彼はフィディアースに我慢ならなかった。彼が綱の上の踊りと呼ぶセヴィニェ夫人の言葉の軽やかさが、彼には不快だった。そしてクーザン氏のうちの教授、大学の擁護者、折衷哲学者、さらに彼の意見では乙にすました著作家を憎んでいた。(16 頁、傍点部分は原文でイタリック)

サゾーノフがこうした特徴を語るのは、「ボードレールが真の詩人、パリの詩人であるから。というのも、フランスの若い作家すべてのなかで、おそらく彼のうちにだけ詩的独創性と自立への抑えがたい志向がうかがえるからだ」、(16 頁)という。さらに、ボードレールの世評と才能について、「この若者は 10 年間にようやく三冊の本を出版し、『両世界評論』に載せたいくつかの詩によってようやくことし世間的に知られはじめたにすぎないが、真の独創性とひじょうに確固とした性格によって、みながたえず彼について語るようになった。(中略)まばゆいばかりの奇矯さの陰にどれほどの心の挫折と知的な苦しみが隠されていることか――これについてはすでに引用した、あるいはあとで示すボードレールの詩から推察することができる。

これまでほとんど抒情詩の中でばかり発揮されてきた彼の才能は、苦しみの末獲得された情感にあふれる内容の深さや、イメージの大胆さと現実性、そして最後に方法の知識や言葉の独自性などの点にある。この最後の点についてはラテン詩人の入念な研究が少なからず役だっており、彼はなかでもルーカーヌスとセネカを好んでいる」、(16-17 頁)と述べる。ついでボードレールの現在の活動と今後の将来性について、次のようにつづける。

おそらくボードレールはさらに前進し向上していくだろう。なぜなら、これまで奇矯さと気紛れな情熱がその才能の成長を抑えてきたからだ。彼はアメリカの作家エドガー・ポーの詩や散文作品の翻訳に数年を費し、まもなくそれは『異常な物語』という二巻本として世に出る予定である。この翻訳は厳格な正確さと言葉の優美さの点で注目すべきものだ。それはフランス文学において、翻訳される作家に匹敵する芸術家によってなされた現代作家の作品の完全な翻訳の最初の例と思われる。そして深い価値によってではないにしても、多くの輝かしい点でそうした名誉に値するものだ。しかし、われわれはとりわけこの本のまもない出版を喜ぶ。というのも、この出版によってボードレールが自分の力をより高度な独自の仕事に向けることができるようになるからだ。われわれは彼の才能が久しく詩が追放されてきた演劇芸術に、詩を復活させることになるかもしれないと期待する。この期待は詩人自身から教えられた民衆劇のプランによるもので、それは華麗な見せ場をそなえ

たドン・ジュアン伝説から主題をとった劇である。[10] (17頁)

そしてその劇が彫像がドン・ジュアンを連れ去るのではなく、ドン・ジュアンに酔いつぶされた彫像が召使たちに廟へ運び去られて終わる、という人を驚かす奇矯な終わり方になっていると述べる。ついで最後に前置きがなければ非常に奇妙に見えたかもしれないがと断って、当時フランスで未発表であった詩<Le Flacon>をフランス語のまま掲載して紹介を終えている。

以上の紹介でまず注目されるのは、ボードレールの詩的才能を高く評価し、時代の環境が許せば彼が偉大な詩人たちの高みにまで達するだろう、と述べている点である。詩人としてのボードレールについては、この年の6月「悪の華」の名のもと18の詩がまとめて『両世界評論』に発表されたのを機に、ルイ・グーグルが11月4日付『フィガロ』紙に批評を載せたのが、多少まとまったかたち批評としては唯一の批評だった。しかしそれも、「いわばボードレールについてのスキャンダルを叫び立てる祖形をなすことになるもの」[11]といった否定的な評で、参考に一節を示せば次のようなものだった。

> われわれは見出すだろう(中略)、いたるところ思想の欠如を隠すための野心的なアレゴリーの同じような堆積、無知で凍った色のない同じような言葉、「ノミ、シラミ、腐った死体、恐ろしい殺人者、墓の蛆虫」といった語をピトレスクに散りばめた詩句を。
>
> そして『両世界評論』がわれわれの時代に特有のある衰弱、ある精神的苦悩の表現としてわれわれに提供するこの痙攣的な胸むかつかせる詩！　しかし、率直に言って、ボードレール氏の詩を、この墓や屠殺者の詩を現代の苦悩の不完全な表現としてさえ受けいれることができようか？(中略)
>
> …意表をつくので有名だったが失墜して、ボードレール氏は以後、現代詩の落伍者の一人として引きあいにだされるだけだろう.[12]

上のような評言と比べれば、現在から見て当然のようなサゾーノフの高い評価が先駆的なものだったことがうかがえよう。また、サゾーノフはボードレールの一見奇矯な言動が、合理的な計算にもとづく複雑なシステムを備えたものであるのを指摘し、<Le Flacon>の奇妙さもこれと無縁でないものとして紹介している。ボードレールの奇矯な言動や人を驚かせ

---

[10] 「ドン・ジュアンの最後」というオペラの台本が1852年末前後に構想されていたことについては、『ボードレール全集』阿部良雄訳、第2巻、筑摩書房、1984、444頁の註を参照(以下、阿部良雄訳筑摩書房版6巻本『ボードレール全集』からの引用は、『ボードレール全集』と略記する)。1855年当時も戯曲として構想していたらしいことがわかる。

[11] 阿部良雄、『シャルル・ボードレール【現代性の成立】』、河出書房新社、1995、280頁。

[12] W. T. Bandy, *Baudelaire Judged by His Contemporaries (1845-1867)*, New York, 1933, pp. 21 - 22.

るのに熱心だったことについては、同時代の多くの人が語っているが、[13]サゾーノフはそれがボードレールの詩の方法とも結びついていたことをおぼろげながら認識していたようである。[14]

彼が紹介したエピソードのなかでとりわけ注目されるのは、「美はもしもそのなかに奇異さがなければ美ではない。」、というボードレールの言葉をめぐる逸話である。イタリックで引かれたこの言葉は、「1855 年の万国博覧会、美術」中の次の有名な一節を思いおこさせよう。

> 美は常に奇異である。(中略)私が言いたいのは、美は常に、少量の奇異さ、素朴な、故意のものではない、無意識の奇異さを含んでいて、それを特に〈美〉たらしめているものはまさにこの奇異さだ、ということである。[15]

サゾーノフの引いた言葉は引用文の言葉を一言でまとめた形になっており、ボードレールが当時こうした考えを口にもしていたことがわかる。イタリックの表現はボードレールの発言であることを示すだけでなく、同じ年に発表された上の文章を意識していたかにも見えるが、紹介文には美術批評家としてのボードレールについては言及がなく定かでない。サゾーノフはこうしたボードレールの美意識が熱帯地方への旅行の体験とつながりのあることを示唆しているが、「やがて人口に膾しゃくすることになる」[16]ボードレールの美をめぐる言葉にいち早く注目しているのは、彼の批評眼の鋭さを感じさせる。また、ボードレールに反論した「スラヴ人」の言葉も的をついており、検閲を意識して名を伏せているかに見えるこの「スラヴ人」が誰だったか興味深い。[17]

詩についてはあまり具体的に論じていないが、「朝の薄明」の特色の一つにパリの情景の写真的な描写をあげ、他の場所でもボードレールの詩のイメージの現実性を指摘していて、(17頁) レアリスムにつながる一面を見ていたものと推測される。象徴派の祖という世紀末の詩人像と異なり、生前ボードレールは『悪の華』裁判で節度のないレアリスムを指弾されたよ

---

[13] *Baudelaire devant ses contemporaines,* Textes recueillis et publiés par W. T. Bandy et Claude Pichois, Monaco, 1957, p. 246.

[14] 「驚き」の詩学については、『ボードレール全集』第 4 巻、422 頁の註を参照。

[15] 『ボードレール全集』第 3 巻、261 頁 (Baudelaire, *Oeuvres complètes,* texte établi, présenté et annonté par Claude Pichois, Bibliothèque de la Pléiade, vol. II, 1976, p. 578. 以下、同プレイアード版全集については、B. O. C. と略記する)。1855 年 5 月 26 日『祖国』紙に掲載.

[16] 阿部良雄、『西欧との対話—思考の原点を求めて』、第三文明社、1989、45 頁。

[17] ロシアまたはポーランドの亡命活動家の可能性があり(サゾーノフは1855年、ポーランド人の女性と結婚している)、この逸話からボードレールがサゾーノフをはじめとする東欧の亡命者ともつきあいのあったらしいことがわかる。1840 年代半ばからサゾーノフと知りあっていたこととあわせて、プレイヤード版の注の記述と異なり (B. C. vol. II, p. 1033)、サゾーノフが反体制運動家であることをボードレールが知っていた可能性が高い。

うにレアリスム視されることがあったが、サゾーノフの見方もそうした面にふれるところがあったと考えられる。また、詩の方法の知識や言葉の独自性にも才能が発揮されている、とラテン詩人の研究にもふれながら述べているのは、ボードレールが中学時代ラテン語の詩作をよくし、ルーカーヌスなどを愛読したという事実と合致している。[18]

ポーの翻訳についての「翻訳される作家に匹敵する芸術家によってなされた」翻訳という言葉も、本が未刊行でポーもボードレールもまだあまり認められていない時代であったことを思えば予言的な言葉で、ボードレールに大詩人に連なる将来性を認めた言葉とあわせてサゾーノフの評言の的確さがきわだつ。人物像の紹介に重点をおいた文章であるが、詩人としてのボードレールを「詩的天才」とごく早い時期に認め評価した紹介として記憶されるに価しよう。もちろんサゾーノフも書いたとおり、ボードレールはパリの一部の文学者、芸術家のあいだで以前から知られており、友人たちにその才能を認められていた。美の定義をめぐるエピソードにうかがえるように、サゾーノフもその友人のグループの近くにいて、この紹介文もいわば仲間うちの好意によるところがあったと考えられるが、そのことを考慮してもサゾーノフの先駆性は否定しがたい。

ところで、ボードレールについて他の三人の詩人の評価と異なるところはあるだろうか。

記事では各人に四頁前後がほぼ均等に割かれ、いずれも未発表あるいは最近の詩を紹介するなど、サゾーノフがとくに肩入れしているような詩人は見られない。バンヴィルについてだけ履歴の紹介がなく、もっぱらその詩の特徴、技法に優れる点を詩に即して具体的に説明しているのが異なる程度である。詩人の紹介がボワイエから始まっているのは、サゾーノフがバンヴィルとともに彼とも親しくしていたせいかもしれないが、[19]あたかもおそらく当時世間的に名を知られていなかった順に紹介しているようになっているのは、たんなる偶然かあるいは意図的なものだったのか。しいていえば、ボワイエに「才能」(талант,дар)を認めているのにたいし、[20]ボードレールにはさらに「天才」(гений)を認めていること、またP.デュポンを民衆的な詩の復活者として評価しながら、彼がフランス詩の将来を保証する存在であるわけではないと述べているのに比べれば、ボードレールの将来性が高く買われていたといえようか。

(二)『サンクト・ペテルブルク報知』のボードレール紹介

---

[18] ボードレールがルーカーヌスを愛読したことについては、『ボードレール全集』第1巻、545頁を参照。

[19] バンヴィルの『綱渡りのオード』第二版(1859)中の詩〈Nadar〉(1858)のなかには、サゾーノフの名がH. Murger、J. Lemerとともに出てくる。(Th. de Banville, *Odes funambulesques*, Paris, 1912, p. 107.) また、サゾーノフはパリの演劇界の情報などをボワイエから教わり、一緒に劇場に出入りしていた。

[20] ボワイエが即興的な創作の異常な才能の点で、他の若い詩人と異なっていると指摘している。(12頁)なお、ボワイエについては、Sylvian-Christian David, *Philoxène Boyer: Un sale ami de Baudelaire*, Paris, 1987. に詳しいが、サゾーノフについては言及がない。

ところで、サゾーノフは『祖国雑記』での紹介と相前後して1855年後半から1857年にかけて新聞『サンクト・ペテルブルク報知』(*Санкт-Петербурские ведмости*)の西欧通信員も勤め、そこで断続的に連載していたフェリエトンのなかでもボードレールにふれている。

1856年第10号の「冬のパリの話題概観」(1856年1月6日執筆)では、G.サンドの演劇活動に関連してフィリベール・ルヴィエールに言及し、近頃有名になってきたこの俳優について、最近若き詩人ボードレールが伝記を書いた、と彼の批評「フィリベール・ルヴィエール」の冒頭の段落約40行を原文のまま引用している。これはおそらく1852年の《*Panthéon*》NO.9にフランス語のまま載せられた、この年のポー論につぐロシアでのボードレールの原文の紹介である。[21]また、第63号のフェリエトンではボードレールが翻訳したポーの『異常な物語集』を紹介し、[22]「最近私が『祖国雑記』に書いた若き才能ある詩人ボードレール」と書いている。

さらに1855年第254号と1856年第135号のフェリエトンにも、ボードレールらしき人物のエピソードを紹介している。ボードレールのものとすれば興味深い逸話なので、少し詳しく紹介しておく。

ひとつは1855年のパリでの万国博覧会のさい開かれた美術展をめぐってのもので、次のように語られている。

> 人間嫌いで皮肉な傾向のある人々は絶望して意地悪く嘲笑する。最近私はエリゼ広場でユーモアに富んだ一人の友人に出会った。彼は美術展からの帰りでモンテーニュ大通りからやってきて、ひどく憂鬱な印象を美術展から受けたように見えた。
>
> 「まったく、君、わたしの言うとおりじゃないか?」、と彼は私に出会うと興奮して叫んだ。「じきにフランスは中国化する(la France se chinoisera bientôt.)。なぜだって?なぜなら、われわれは年々ますます芸術から手工芸に、霊感から機械仕掛(メカニック)に、形象による競演と自然の研究から、まったき生命の死んだ断片ばかりを描いて、それ自体なんら意味のない細部と枝葉末節のなにか無意味な模倣、あるいは模写へと移っているからだ。たしかにこれはまだましだ。いわゆるレアリスムにはそれなりのよい面もあるから。しかし、歴史や風俗画を描くわが国の若い画家のほとんどは、そしてすべての彫刻家が属するこの名のない流派は、物質的な効果の研究や探求以外なんの嗜みも持っていない。彼らはその物質的な効果をひとたび見つけると、あとで使えるものにはなんにでも見境もなくそれを

---

[21] Joan Delaney Grossman, *Edgar Allan Poe in Russia: A Study in Legend and Literary Influence*, Würzburg, 1973, P. 29.

[22]『サンクト・ペテルブルク報知』におけるサゾーノフのフェリエトンの掲載号数については、W.シリボフスカの前記論文に教えられたが、この点についてはW.シリボフスカがすでにふれている。(W. Śliwowska, *op. cit.*, p. 357.)

また、サゾーノフはこれより早く1856第2号で『祖国雑記』に4人の叙情詩人を紹介した記事を書いたことを述べ、ボードレールの名をあげている。

応用するのだ！　また、もう一つの風景画家たちの流派は、年々たとえば空が大地と溶けあう地平線や木の梢が大気のなかに溶けこむ線を研究してきた。これらの人々はかってないテクニックの非常な巧妙さを身につけ、自分の才能を風景を描くのに向けた。その風景のなかには意味をのぞけばすべての価値がある。ちょうどアリオストによって描かれた馬はあらゆる性質を備えてはいたが、不幸なことに死んでいたのと同様に。いや、」とユーモリストは続けた。「彼らのだれもが、もっとも才能のある者たちも芸術にたいする敬意が欠けている。ドラクロワは最上のものでも劇の書割のような、あるいはカレイドスコープの遊戯のような絵を出品している。アングルは自分の青年、壮年時代の堂々たる作品と並べて、『ジャンヌ・ダルク』『ナポレオン一世の列神式』のような老齢の弱々しい作品を恥かしげもなく公衆に見せている。芸術はこのあつかましさに復讐し、わが国の新しい絵画はみな近い将来忘れさられるだろう。フランスは技巧の巧みさに決定的に秀でることによって現在自分の勝利を誇っているが、高尚な思想豊かなドイツ美術と、華麗な空想と自然に忠実な独自のレアリスムのイギリス美術のすみやかで厳かな発展が、すでに予想できる。フランス人は純粋な美術の領域を捨て、ますます手工芸にふけるだろう。そしてついには、ヨーロッパ中に中国がかつて東洋中に同じような産物を供給したのと同様に、ブロンズ像や陶器の花瓶、絹物を送りだすだろう。しかし、おそらくわが国の画家は、さらに女性のスカートのデザインや男物のチョッキの模様を手がけるだろう。そうしてこの新たな特技の発明によって、中国人を凌駕するだろう。しかし、こうしたことはすでにみな考案されていることであり、産業美術（L'art industriel）あるいは芸術産業（L'industrie artistique）という名のものに使われるようになっているのだ。」

わたしがこの発言をここに書きとめるのは、ただ、パリ人自身がパリの新しいものの欠点をどれだけ、そしてどのように理解しているか示すためである」（『サンクト・ペテルブルク報知』1855年第254号、記事の冒頭に「1855年11月パリ」とある）。

冒頭のモンテーニュ大通りは、1855年のパリ万国博で美術宮殿が建てられ、美術展が開かれた場所である。ボードレールとの関連を連想させる点をいくつか指摘すれば、同時代のフランス絵画の技能偏重にたいする批判は、「1859年のサロン」でメソニエに関連して述べた次の言葉に通じている――「想像力の価値下落。大きなものへの軽蔑、技能への愛（いや、この語は立派すぎる）、ひたすら技能のみの実践、こういったところが、こと芸術家に関して、その低落の主要な理由だと思います」。[23]

中国の工芸にことよせてフランス美術を考えているのも、多くの万国博の美術展評のなかで中国美術に言及したのがボードレールとゴーティエ以外ほとんどいなかったという事実

---

[23] 『ボードレール全集』第3巻、301頁（B.O.C. vol. II. p. 612.）、および465頁の註を参照。

とのつながりを考えさせる。[24]また、アングルの『ジャンヌ・ダルク』や『ナポレオン一世の列神式』への批判的な言葉も、この年に書かれた彼の「1855 年の万国博、美術」中のこの二つの絵に対する批判的表現と照応している。[25]とくに、アリオストの描いた死んだような馬をめぐる言葉は、『ナポレオン一世の列神式』に描かれた馬について、「トロイアの町を占領した木馬のような硬い材質でできているかのように見えるこの馬たちは、いったい何で造られているのか」[26]と述べた言葉を思わせる。「レアリスム」と「自然の研究」という言葉の結びつきも、シャンフルーリをめぐり、「古典的狂気とロマン主義的狂気に変えるに、自然の研究および自分自身の研究をもってすることを自負する、いわゆる写実派の一人」と書いたボードレールの言葉を想起させる。[27]

一方、「劇の書割」「カレイドスコープの遊戯」というドラクロワの絵にたいする辛らつな言葉は、彼を高く評価したボードレールの批評に見られぬもので、サゾーノフが紹介したこの人物がボードレールか疑問視する一つのポイントとなろう。[28]また、イギリス美術を評価している点は、ボードレールの万国博美術展評の第一章末と合致するが、[29]ドイツ美術の思想性を評価しているのは、彼がドイツ画派やリヨン画派の唯心的傾向を批判したことと多少齟齬を見せているといえるかもしれない。[30]しかし、次に紹介する同じ人物のエピソードとあわせて考えるとボードレールの可能性が多分にあり、そうとすればボードレールの万国博の美術展評を考えるうえで貴重な材料を提供する紹介である。

もうひとつのエピソードは1856 年6 月、当時パリのエリゼ広場で開かれていた万国農業博覧会を訪れたときのもので、6 月 2 日のことと記されている。[31]サゾーノフはこの日、途

---

[24] 同上書、452 頁の註によればほかに一人だけ。

[25]同上書、272−3 頁(B. O. C. vol. Ⅱ, pp. 588-9.)、および451 頁の註を参照。『ジャンヌ・ダルク』については、「《列神式》におけると同様、感情と超自然性との全き欠如」という言葉がある(同書、273 頁。B. O. C. vol. Ⅱ, p. 589.)。

[26] 同上書、272 頁(B. O. C. vol. Ⅱ, p. 588.)。

[27]『ボードレール全集』第6 巻、32 頁、1853 年3 月の手紙参照。さらに、フランス美術がその技術的巧妙さによって優位を保っていることを言っているのは、万国博の美術展評でフランスが周囲の観念、詩想を取り集め、それにすばらしい加工、細工を施して返してやっている、と述べているのに通じるか。同上全集、第3 巻、264 頁参照。

[28]「1855 年の万国博覧会、美術」の3. ドラクロワの節を参照。クロード・ピショワ、ジャン・ジーグレール著『シャルル・ボードレール』によれば、ドラクロワに冷淡にされていたことや、「ボードレールは同時代の文学者や芸術家については、二重の意味にとれる評価、つまり一般向けの評価と親しい者向けの評価を下すことが多かった」というので、その一例といえるか(『シャルル・ボードレール』渡辺邦彦訳、作品社、2003、582 頁、および283、311 頁参照)。

[29] 『ボードレール全集』第3 巻、265 頁(B. O. C. vol. Ⅱ, p. 582.)、および387、464 頁の註を参照。

[30]同上書、387 頁の註や未定稿「哲学的芸術」、これについての460 頁の註を参照。

[31] サゾーノフは6 月2 日記の第121 号でバンヴィルの詩を紹介した後、この万国農業博覧会に話題を移し、農業の見地からではなく文学的な面から次にこの博覧会について語ると断っている。

中で出会った博物学にも携わる友人と会場を見てまわり、その友人は品種改良された植物や養殖のサケ、マスなどを見ながら、人間の科学による自然の改良と支配を肯定的に語っていた。そこへボードレールらしき人物がやってきて言ったことを次のように書く。

こうしたことを話しているところに、私がすでに一度読者に紹介する栄をえた友人、去年の美術展をひどく辛らつに評したあのペシミストがわれわれのところにやってきた。

「人間の自然に対する征服を称賛し誇るがよい。」と彼は興奮して叫んだ。「ちょうどそのとき、自然はあなた方の自画自賛に厳しく復讐しているのです。あなた方はおそらく、ローヌ川が新たな流れを掘り抜き、リヨンの四分の三を水に沈めているのをまだ知らないのでしょう。?」（中略）[32]じっさいまだこの破局のことを聞いていなかったので、われわれ二人はドキッと身震いした。ペシミストはこの効果に満足して、われわれを意味ありげに見てつづけて言った。

「あなた方はここで産業の成功に見とれ、人間が自分の気まぐれを満足させるために、自然の優美な産物をゆがめるのに成功したことを喜んでいるのですか。脂肪が体によくないのはよく知られています。それなのにあなた方は自分の脂肪であえぐようになるほど動物を太らせる。そしてこの病的な目的をとげるために、不必要な腐った養液を与えて植物自体を片輪にする。それにこの醜悪な交配はいったいなんです。どこからあなた方は動物の種や属を組みあわせ、混ぜあわせる権利を得たのです。自然は生活するよう運命づけられた気候や土地にあった、生まれた土地が与える食べ物に適した特徴をもつ動物を生みだしました。空気や水、土壌の質は植物を条件づけ、動物は食べる植物に条件づけられます。植物や動物を食べる人間には食べ物をとおして自分の生まれた土地の性格が伝わり、その土壌で活動できるようになるのです。動物や植物の種のすべてが雑種の無性格、無国籍な産物に混ざりあってしまったら、そのときは人種も同様の混沌たる混合にいたるでしょう。国民性はなくなり、祖国愛は失せるでしょう。そしてついには個性がなくなり、人々は群集にすら見えなくなり——というのも群集には意志があるのですから——植物の汁を繊維素に、あるいは繊維素を脳味噌に変えるために窮屈な家畜小屋に集められた動物のたんなる塊のように見えてくるでしょう。」

この発言は私にはあまりにも幻想的（ファンタスチック）に思われた。博物学者はわれわれの新たな対話者をまるで狂人を見るように見た。しかし、私は彼がただ変わり者で、知人や見知らぬ人々を驚くべき逆説（パラドクス）で驚かせるのが好きなのがわかっていた。（『サンクト・ペテルブルク報知』1856年第135号）

---

[32] サゾーノフは（中略）の部分で、洪水がじっさいにはそれほどにはひどくないことがのちにわかったと書いている。

進歩を謳歌する人間の傲慢にたいして、皮肉な冷笑を浴びせるエピソードで、ペシミストで「逆説（パラドクス）で人を驚かせるのが好き」という人物像は、サゾーノフが『祖国雑記』の記事で紹介したボードレール像と一致している。また、ボードレールは少年時代にリヨンで暮らしてローヌ川を知っており、リヨンの洪水をめぐる言葉もボードレールとのつながりを考えさせる。個性や国民性を喪失した意志をもたぬ人間が、群衆とも呼べぬように家畜化していく奇抜なイメージ、繊維素から脳味噌への言及なども、ボードレール的な感覚を感じさせる。とくに環境や風土にもとづく諸国民の多様性の擁護や、進歩の観念に対する批判は、ともに「1855年の万国博覧会」の第一章に載せられていて、[33]当時のボードレールの考え方とよく通じている。オプスミステックな進歩礼賛にたいする批判は、『赤裸の心』をはじめボードレールの批評の随所に見られ、[34]同様の批判は当時他の人々のあいだにもあったものの、万国博の美術展を辛らつに評した先の逸話と同一人物であることから、ボードレールと考えておかしくないエピソードである。[35]現代風に言えば、進歩が人を家畜化するというアンチ・ユートピアを語るボードレール、あるいはエコロジスト的なボードレールがかいま見えるといえようか。ボードレールの言葉をどこまで正確に伝えたものか慎重でなければならないが、当時の記録が乏しいだけに、興味深い逸話である。

これらボードレールと彼らしき人物の紹介記事が、ロシアの読者の注意をどれだけ引いたか定かでないが、ボードレールが1857年6月『悪の華』の刊行にさいして、「『祖国雑記』に書いてくれるはず」と書いてサゾーノフの名を献呈先のリストに載せたのは、[36]自分を紹介した記事をサゾーノフが書いていたことをすでに知っていたためと推測される。サゾーノフはこの少し前にTh.バンヴィルの『綱渡りのオード』の二二頁にわたる異例に長文の紹介記事を『祖国雑記』雑誌に載せており、[37]ボードレールの詩集も紹介してあげると伝えていたのもしれない。しかし、筆者の見た限り1857-58年の『祖国雑記』や『サンクト・ペテルブルク報知』には『悪の華』の紹介記事は載せられていない。また、ロシアでは早くも1858年ないし59年に『悪の華』初版の翻訳の申請があったが（当時は事前検閲）、『ボヴァリー夫人』の場合などと異なり許可がおりなかった。この翻訳の動きにサゾーノフが関係していたのか、あるいはすでにサゾーノフ以外にボードレールに注目していた人物がいたのか

---

[33] 『ボードレール全集』第3巻、261－4頁（B.O.C. vol. II, pp. 578-581.）。また『哀れなベルギー』には、「住民の本性に似た自然」というやはり自然とそこに住む住民とのつながりを意識した言葉がある（同全集、第4巻、381頁。B.O.C. vol. II, p. 945.）。

[34] 同全集、第6巻、47頁（B.O.C. vol. I. p. 681）。

[35] ただしボードレールとすれば、後者の記事ですでに二度ボードレールの名にふれているサゾーノフが、なぜ名を記さなかったのか疑問が残る。あえて名をあげる必要を認めなかったのか、あるいはおおよその発言の引用なので名を記すのを遠慮したものか。

[36] B.C. vol. I. p. 407.

[37] *Отечественные записки*, том.112, 1857, №2, отд.4, сс.77-89.
「パリ、3月25日」の署名がある。

不明である。[38]さらに F. ヴェントゥーリによれば、サゾーノフが編集長を務めていた 1860 年の『北方誌』(*Gazette du Nord*)の最後の数号(1860 年 6 月 30 日廃刊)には、フュユトンとして『人工天国』が載せられたといい、[39]この掲載にもサゾーノフが関係していた可能性がある。[40]なおつけ加えれば、社会運動家のサゾーノフがボードレールに関心をいだいたのは、後にロシアで急進派の詩人 Д. Д. ミナーエフが「アベルとカイン」を翻訳し(1870 年)、ナロードニキの詩人 П. Ф. ヤクボーヴィチ がボードレールの詩の初期の翻訳紹介に精力的にたずさわったのに先駆けるものだった。サゾーノフの紹介そのものは、ボードレールの反体制的といえるような面にはほとんど触れていないが、「パリの人々は未開人より野蛮だと思ったのかもしれない」という言葉に、あるいは二月革命の体験の跡を読みとれるかもしれない。象徴主義の祖という世紀末のボードレール像以前に、詩人の社会批判の側面が注目されていたのは、いかにもロシア的な現象で興味深い。[41]いずれにしても以上の記事から、ロシアにおけるボードレールの紹介が他のヨーロッパ諸国に先行していたことが確認できる。

(三)サゾーノフの文学観

つぎにボードレールの紹介から少し離れて、彼の書いた他の記事からうかがえるサゾーノフの文学観についてすこし見ていきたい。

彼は 4 人のフランス詩人を紹介した先の『祖国雑記』の記事の結びで、次のように述べている。

「あわただしくはあるが確かなこの一連の概観で、長年の研究を要したことがらについてロシアの読者に伝えることができるとよいのだが。外国の文学や総じて外国の市民性を理解するためのおもなむつかしさは、過去によって現在が説明され、またその逆でもあることだ。そのためには過去についての学問、すなわち歴史が必要で、(中略)さらには確かな現代的感覚が必要である。とりわけこれは歴史全体の課題であり、複雑でほとんど未解

---

[38]И.Айзеншток, Французские писатели в оценках царской цензуры, *Литературное наследство*, тт.33-34, М., 1939, сс.821, 823.
検閲者の報告は 1859 年 1 月 24 日付で、申請はすでに 1858 年にあった可能性がある。申請者が誰であったか上記の論文に言及がないが、『悪の華』初版がすでにロシアに渡っていたことがわかる。

[39] Franco Venturi, *Studies in Free Russia*, translated by F. S. Walsby and M. O' Dell, Chicago and London, 1982, p. 210.

[40] ボードレールは 1860 年 4 月 23 日、27 日付プレ・マラシあて手紙で、『人工天国』の校正に関連してサゾーノフの名に言及しており、サゾーノフが『人工天国』のことを知っていたことが推測できる (B. C. vol. II. pp. 31, 32)。

[41] Adrian Wanner, *Baudelaire in Russia*, pp. 12-14, 20-42.
ヤクボーヴィチは 1879 年から 20 世紀初頭にかけてボードレールの約 100 の詩をロシア語訳し、その多くが流刑中のシベリアの地で訳された。彼は世紀末の象徴派的なボードレール紹介に抗して、ボードレールを象徴主義者と混同してはならないと述べたという。

決の課題である。われわれはいままでフランス文学についてこの課題にとりくんできた。」(26 頁)

歴史を重視する上の言葉を裏づけるように、サゾーノフは冒頭から紹介文の三分の一ほどのスペースをフランス語の歴史とその詩語としての特質、中世以来のフランス詩の歩みの解説にあてている。[42]一方、現代的な感覚といえば、まだ世評の定まらぬ四人の詩人を紹介したこの文章が、そのような現代的な感覚の表われの一端であったことはいうまでもない。

また、「ロマン主義の運動はいまやすでにかなり以前に終わってしまった。(中略)それは過度の抒情と無分別な中世の崇拝、そして一部にはイメージや源泉の研究不足のために滅びてしまった。」(8 頁)、とロマン主義に距離をおいた見方をしていることも特徴的である。ユゴーについても、ドイツ的要素を復活させてロマン主義を強化し、ヘレニズム、コルネイユ、ラシーヌを滅ぼそうとしたが、その価値ある試みは十分大衆的な人気を得ず、やがて文学的職人たちの似非ロマン主義にとって代わられてしまったという。ゲルツェンが『過去と思索』で語った夢想的革命家、E.H.カーいうところの「浪漫的亡命者」像が、文学の面ではすでに当時のサゾーノフにあてはまらないことがわかる。

サゾーノフはつづいて『祖国雑記』3 月号でイタリアとドイツの詩を、5 月号でイギリスの詩について報告し、連載を終えている。[43]彼の広範な知見を語るこれらの記事について適切に評価する文学的知識に欠けているので、彼の文学観を知るうえで参考になるいくつかの点に限ってふれておきたい。

イタリア詩を論じた三月号の記事で、サゾーノフは詩が神の言葉であるという信念がイタリア以外では失われ、「詩と散文は本質的に同じで、詩は散文に近づけば近づくほど美しい」という愚かな考えがヨーロッパ全体に広まっていると指摘する。(同号、第 5 部、4 頁)ハイネがドイツ詩にこの笑止な混交をもたらし、彼にならってヨーロッパ中が韻の破壊された散文的な詩を書きはじめたが、サゾーノフはこの混乱から抜けだすべきだと主張する。そしてそのころヨーロッパで流行していたダンテの研究が、若い詩人たちを散文にたいする不自然な執着から解放するだろうと述べる。この言葉は彼が近代詩の散文化の傾向を認識していた

---

[42] およそつぎのようなことを述べている。——ラテン語を中心にケルト、ゲルマンの各要素が混交してできたフランス語は、祖先の伝説を伝える生きた言葉、民族の特質と結びついた言葉ではなく、人工的で真の詩は不可能である。また叙事詩は社会が調和的に発展し、民族全体が一つの信仰によって鼓舞されるギリシャのような所だけで可能で、フランスにはこの条件が欠けていた。一方、上の三つの要素の混交がフランスで悲劇を生むのを可能にし、さらにフランス語の抽象性はギリシャ、ローマの伝説の復活を可能にした。—— (1−7 頁)こうした見方の当否は別として、サゾーノフに歴史的に大きな枠組みで文化現象を捉えようとする姿勢があったことがわかる。

[43] イタリアについてはダンテ以降の詩を概観し、十九世紀の詩人としてジョゼーヌ・ジュスチ、ジョヴァンニ・プラーチ、ジュゼーネ・レヴェーレ等にふれている。ドイツについては主にヘルヴェークの未発表の戯曲を、イギリスではキングスレー、テニソン、ブラウニングらを扱っている。

ことを示す一方、ボードレールやシャンフルーリ等詩の散文化を推し進めたグループのそばにいながら、必ずしも彼らと同じ志向を持っていたわけではないこと、むしろ逆の美意識の持主だったことがわかる。詩の素材やテーマの現代化の必要を認めながらも、詩の詩たるゆえんの土台である形式を尊ぶ姿勢は、同時代のロシア文学界で顕著になっていった形式軽視の風潮からすれば反時代的なものだった。

サゾーノフの詩の愛好がこうした形式性への愛着に裏打ちされていたことは、テニソンの長編詩<Maud>の音楽性の素晴らしさを称賛するところなどにも表われており、(同誌、5月号、第5部、34頁) 詩の純粋な愛好家であったことをうかがわせる。じっさい、彼は三回の連載を結ぶにあたり、詩が当時多くの人から軽視されていることにふれて、詩の社会的な役割について、「詩が疲れたときわれわれを癒し、たえずわれわれに人生の崇高な目的を教えてくれるように、実りあるレヴェルの労働に喜んでたずさわろう」(同上、42頁)、と述べている。別の場所でも「われわれは疑いなく詩を愛する。われわれの世紀は詩なしには生きていけない。」、[44]とどこか「およそ健康な人間は誰しも二日間は食べずにすませられるが、——詩なしには決してそうはゆかないのだから」、[45]とのボードレールの言葉を思いださせるようなことを書いている。その反時代的な言葉から、彼がまだなかば無名であったボードレールをはじめとするフランスの詩人たちに親しまれた理由の一端が推測できる。[46]「詩と労働」をめぐっては連載の第一回の結びでも、十九世紀が一八世紀に比べて詩の世紀と呼ぶことができ、一方、労働が生活の条件としてますます不可欠になっているのを指摘し、「詩と労働とは矛盾の世紀だ、と現代の旧弊な非難者はみな言うだろう。しかし、われわれの信じるところ、この好ましい二律背反のうちにこそ、ベートーベンの音楽を聴きながらときに予感することができる崇高な調和の可能性が含まれているのだ」(26頁)と語っていて、紹介文ではほとんど表に出ていないサゾーノフの社会運動家としての顔を覗かせている。「詩と労働」の調和を語るところには、ユートピア思想の影響の一端を見ることもできようか。[47]

前述のとおり現代性の重視はサゾーノフの批評の特徴だったが、彼の鋭い現代的感覚はフランスの主要なジャーナリズム各誌を紹介した「外国の雑誌概観」(『祖国雑記』1856年8月号)にもよく表われている。『両世界評論』や『パリ評論』をはじめ六つの雑誌の特徴を語ったこの記事では、[48]『パリ評論』が若々しく詩的な傾向をもった雑誌として紹介され、サゾ

---

[44] *Отечественные записки*, том.107, 1856, №8, отд.7, с.2.
「外国文学——《*Les Contemplations*》」中の一文。

[45] 「若い文学者たちへの助言」、『ボードレール全集』第5巻、336頁(B. O. C. vol. Ⅱ, p. 19.)。同様の言葉は『1846年のサロン』にも見られる。同全集、第3巻、73頁(B. O. C. vol. Ⅱ. p. 415.)。

[46] *Ch. Baudelaire Correspondance générale*, éd. J. Crépet, P. Conard, 1947, Paris. vol. Ⅱ, p. 17.

[47] 同様の考え方がボードレールの『1846年のサロン』にも見られることについては、『ボードレール全集』第3巻、410頁参照。

[48] ほかに≪*Revue contemporaine*≫≪*Le Correspondant*≫≪*Journal des économistes*≫

ーノフが訪れた編集室の様子が描かれている。T.ゴーティエやM.デュ・カンを中心に刷新されたこの雑誌が独創的な若い才人たちの避難所の役割をはたし、ボードレールやバンヴィルの詩、Ch.アスリーノの評論を掲載したことを指摘している。この年の暮れに『ボヴァリー夫人』が発表されることになるこの雑誌にいち早く注目し、好意的な紹介をしているのは、サゾーノフ自身編集部に出入りする仲間うちの紹介の側面があったとはいえ、ジャーナリステックな勘の良さに感じさせる。(同上、第4部、121—3頁)

サゾーノフのこの年の紹介でもう一つ注目されるのは、フランスのレアリスムの動向にふれた内容が含まれていることである。彼のレアリスム文学紹介については翌年の『ボヴァリー夫人』評を中心に以前に紹介したが、[49]すでに 56 年の記事の中にもこの点にふれたものが見られる。たとえば、シャンフルーリの未刊の小説『家庭生活の悲惨、あるいはレカミュの遺産』(*Les misères de la vie domestique*)の紹介がそのよい例で、フランスでの発表に先駆けて第一章の抜粋をロシア語訳で『祖国雑記』に掲載させている。(56 年 6 月号)また、12 月号では『シャンフルーリ時報』第1号(《*La Gazette de Champfleury*》1856 年 11 月 1 日)を中心にシャンフルーリのジャーナリズムでの活動もとりあげている。[50]「ロシアで数年前自然派と呼ばれたものにあたるレアリスト派の首領、創立者であるシャンフルーリ氏、疑いなくその短編や物語がフランスに劣らずロシアで知られ愛されている彼は、多くの稀有な美点と並んでさらに若い人々の中でほとんど最初にバルザックに対する崇拝をもたらした人物としてきわだっている。」、(「フランスの雑誌、書籍概観」、同誌、12 月号、第5部、150 頁)あるいは「才能あるシャンフルーリ氏」、(同、153 頁)とその活動を称賛している。そしてフランスにおける近年のバルザック評価の高まりにふれて、バルザックをフランス文学の祖ラブレーに並ぶ存在と述べる。ただし、サゾーノフはレアリスムの台頭を支持してこうした紹介をしたわけでは必ずしもなかった。シャンフルーリの雑誌同様の弱小雑誌として言及した E.デュランティの『レアリスム』誌については、編集者と寄稿者の名を高めるためだけに出されたじきに消え去る雑誌、と冷淡に述べるるだけで、レアリスムの主張そのものへの共感は見せていない。(同、141 頁) しかし、結果的にはフランスのレアリスムのごく早い紹介となっており、翌 57 年の『祖国雑記』の記事ではそうした性格がさらにはっきりと表われてくる。

サゾーノフはボードレールの美術批評に言及していなかったが、一度だけであるが同時代のフランス絵画をとりあげ、美術に関しても一家言もっていたことを示している。1857 年の『祖国雑記』8 月号に載せられた「フランスの雑誌、書籍、パンフレット概観——4.5.6.月」のなかで、そのころ開かれたポール・ドラロシュ(1797 - 1856)の回顧展を論じたのがそれで、彼の芸術観を知るうえで参考になるので少しふれておきたい。

≪*Revue philosophique et religieuse*≫。

[49]前掲 「ロシアにおけるフロベール概観(1857-1870)——『白痴』における『ボヴァリー夫人』・序」。

[50] この雑誌については、『ボードレール全集』第4巻、427 頁の解題を参照。

ポール・ドラロシュは歴史画、肖像画を得意とした当時評判の高かったロマン派の画家である。サゾーノフは彼を色彩や素描の才を欠いた天性の画家とはいえぬ人物と見て、そのようなドラロシュが死後も人気を保っている秘密を次のように説明する。

独創性や独自性、新奇さはフランス人とあい入れないもので、芸術の革新者の正当性を認めざるをえないとき、人々は復讐する機会を待つ。ふつうその機会は新たな傾向からただ表面的な人目をひく要素を借り、それらとこれまでの公衆の様々な要求を醜く折衷する凡庸な働き者のうちに体現される。ドラロシュの役割はロマン主義と呼ばれる芸術の革新のなかでのそうした役割なのである。ドラクロワはユゴー同様に新しい酒に新たな革袋を用意したが、彼らの凡庸な競争相手であるドラロシュやカジミール・ドラヴィーニュはなにも成しとげてはいない。(同誌、8月号、第4部、35−36頁)

ついでその作品を時代別に論評していく。まず、ロマン主義初期の文学に特徴的な情熱的、悲劇的テーマを模倣した作品群について、構成の誇張的な巧妙さや細部の入念な研究、方法の熟練がありながら、真の絵画としての威厳が欠けているという。また、ユゴーの『パリのノートルダム』以後流行した中世回帰、地方色重視の時流にあわせて描かれた作品について、小説の挿絵の類にすぎないと評する。さらにジャンル別にドラロシュの絵画を論じて、彼の生前の名声を1855年のパリ万国博の美術展に不参加だったときの波紋などをまじえて紹介している。そして最後に、想像力やエスプリを備えたドラロシュは努力の結果ある程度の真実をもった作品に到達したが、現在4万フランで売られている彼の絵は、やがて目利きからただのピローグの皮のようなものと見なされるだろう、と予想する。(同上、36-40頁)[51]ここでもサゾーノフは今日につながる予言的な評価を下すのである。

56年の記事にもどれば、サゾーノフはこれまでふれた記事のほか、ユゴーの『観想詩集』評をはじめフランス、イギリスのものを中心に歴史や科学、学術全般にわたる新刊雑誌、書籍の紹介を行っている。なかには引用過多のおざなりな記事もあるが、多くは最新のニュースを豊富な引用を交えて生き生きと伝えたもので、その豊かな知識は当時のロシアの雑誌で異彩を放っている。

なお、最後にサゾーノフの文芸批評の特徴に多少触れれば、ボードレールについても使われていたように original、originalyi(独創的な)、samostoyatelinyi(独自の)等の語が彼の評論に頻出するするキーワードである。しかし、具体的にどのような点でオリジナルなのか十分な説明のないことが多い。フェリエトンあるいは雑報記事として書かれているせいもあってか批評としてはいささか雑ぱくで、緻密さに欠けるうらみがある。新しいものの出現にいち早く注目し、その価値を見きわめる鋭い感覚をもつが、分析力、あるいは粘り強く叙述する態度に多少欠ける印象を受けるのは否めない。サゾーノフがディレタントと評された一因であろうか。[52]

---

[51] ただし、肖像画については彼の名を不朽のものにするものと評価している。(同誌、40-41頁)

[52] リャザーノフは文人としてのサゾーノフについて、ディレッタントで持続的、システ

(4)まとめ

サゾーノフにかんする今日までもっとも詳細なモノグラフィーを著わしたポーランドの研究者ヴィクトリア・シリヴォフスカは、これまでその一端を報告したサゾーノフの西欧文化の紹介について、その判断の独自性と文学的感性の卓越、ジャーナリストとしての才能を指摘し、クリミア戦争後の自由化の時代における最高の西欧文化紹介者、その記事を集めれば優に大冊の本をなす1850年代のロシア批評史の空白を埋める存在、と高く評価している。[53]同時にサゾーノフが現在忘れられた存在となっていることも言っているが、いずれも妥当な評言といえよう。

文化紹介者、批評家としてのサゾーノフは、シリヴォフスカも述べるように今日までほとんど顧みられることがなかった。一方、彼の西欧での政治活動、とくにマルクスとの関係については、以前から多少知られている。また、彼の名はゲルツェンとの関連で言及されることがしばしばあって、ゲルツェンのモスクワ大学以来の友人、同じ亡命活動家として歴史家に知られていた。これにはゲルツェンが、『過去と思索』の第五部「ロシアの影」で一節を設けてサゾーノフの半生を語ったことが力あった。しかし、サゾーノフをいささか戯画的に描いたため彼の実像を歪め、後世のサゾーノフにたいする評価を低める一因となったことは否めない。もちろん、ゲルツェンがとりあげなければ現在にもまして忘れ去られた可能性が高いが、その功罪は相半ばするのである。『過去と思索』のサゾーノフにかんする記述に多くの誤りのあることは、つとにД.リャザーノフが指摘しており、その誤りの多さはゲルツェンの叙述の誠実さを疑わせるものである。[54]

いまその点については措くとして、ゲルツェンとサゾーノフを比較して気づくのは、『過去と思索』のゲルツェンが当然のこととはいえ当時の有名人を中心に語っているのにたいし、こと芸術にかんしてはサゾーノフがまだなかば無名の詩人、小説家を積極的にとりあげ、同時代の新たな芸術動向に旺盛な関心を見せていることである。サゾーノフがパリで無名の詩人達とつきあっていたことは『過去と思索』でも言及されているが、[55]それにたいする冷たい筆致からはゲルツェンにそうした関心は見るべくもない。

また、サゾーノフの記事からは政治的な主張だけでなく、彼の素顔、肉声があまり感じられないのも特徴的である。ゲルツェンが描いたような誇り高く尊大なサゾーノフ、我執の強さといったものはほとんどうかがえず、むしろ、サゾーノフを語るゲルツェンのシニカルな筆致に、ゲルツェンの自尊心の強さを感じさせられる。検閲を配慮しているせいかもしれな

マティックな仕事に向いていなかったと評する（Д.Рязанов, *Указ.соч.*, cc.20, 24.）。これはゲルツェンが『過去と思索』で語ったサゾーノフ像とも通じている。

[53]W. Śliwowska, *op. cit.*, p. 355.

[54]Д.Рязанов, *Указ.соч.*, cc.17, 24.

たんなる誤りでなく、故意に悪く書いているという。M.カドも特別な悪意をもって書かれていると述べる（M. Cadot, op. cit., p. 34.）。

[55] А.И.Герцен, *Собр.соч.в 30 томах*, т.10, М., 1956, с.324.

いが、ゲルツェンに根深い2月革命の挫折の影に類するものもサゾーノフの文章には見られない。

ところで、サゾーノフとマルクスとのロシア人としてはごく早い40-50年代の交友を明らかにしたのも前述のリャザーノフだった。彼は 1918 年に出版された『カール・マルクスと19 世紀 40 年代のロシア人』で、サゾーノフやП.B.アンネンコフとマルクスとの交流をドイツのマルクス・アールヒーフの調査を通して紹介し、サゾーノフを「ロシア最初のマルクス主義者」と呼んだのだった。[56]サゾーノフがマルクスを知るのは1843-4年頃にまでさかのぼるが、[57]両者が知りあったことがはっきりわかるのは二月革命以降である。1849年以降サゾーノフがマルクスに宛てた手紙が四通残されており、『レフォルム』紙やサゾーノフが発刊を計画した雑誌への寄稿の依頼、あるいは1851年には共産党宣言のフランス語訳を半分ほど試みたことなどが書かれている。ロシアのスパイではないかと疑われたり、女性関係の華やかさからマルクスの信頼を得られなかったようだが、[58]サゾーノフはマルクスの仕事と才能を高く評価し、ボードレールの場合と同様、天才と呼んで、自分をコミュニストと述べるなどの傾倒を見せている。50 年代末のサゾーノフはロシアの問題にかんして現実的な立憲主義者、貴族的自由主義者に変わったと言われるが、[59]1860年5月にはパリからロンドンのマルクスへ前年出版された『経済学批判』(1859)を称賛し、そのころカール・フォークトと論争を行っていたマルクスに経済学の研究に戻るように訴えるつぎのような手紙を書き送っている。

> あの中傷が発表された、まさに同じ瞬間に、あなたは、経済学を革新し、それを新しい、より堅固な地盤の上に建設すべき、あの卓越した著作の第一部を学会に贈られただけに、なおのこと私はこんな中傷を読まなければならないことが苦痛でした。……親愛なマルクス、こんな、あさましい、つまらないことに、これ以上かかり合いになるのをおやめなさい。まじめな人間、良心的な人間は、みな、あなたの味方ですよ。(しかし、そういう人たちは、あなたに、役にも立たない論争ではない別のなにかを期待しているのです。つまり、できるだけ早くあなたのりっぱな著作のつづきを勉強させてもらえるのを、期待し

---

[56] Д.Рязанов, *Указ.соч.*, с.31.
また、マルクスがパリにいたころのサゾーノフは「ロシア貴族」的タイプの人間で、マルクスの崇拝者であったか疑わしく、『レフォルム』紙的なブルジョワ民主主義の立場だったとも述べる。(同書、29頁)

[57] Д.Рязанов, *Указ.соч.*, с.24.
サゾーノフは1844年にドイツの詩人ヘルヴェークの所でマルクスと知りあった可能性があるという。(同書、27頁)

[58] エンゲルスの1851年10月15日付マルクス宛手紙、『マルクス・エンゲルス全集』第27巻、大月書店、1971、309頁、およびマルクスの1856年9月22日付エンゲルス宛手紙、『マルクス・エンゲルス全集』第29巻、大月書店、1972、58頁。

[59] Б.Козимин, Из литературного наследства Н.И.Сазонова, *Литературное наследство*, т.42-43, М., 1941, с.186.

ているのですよ。）（中略）親愛なマルクス、健康でいてください。そして、これまでどおり、世間を啓蒙する仕事をつづけてください。[60]

こうしたサゾーノフの革命家としての側面は、前述のように『祖国雑記』の西欧通信には検閲を配慮したためか、ほとんど表に出ていない。

ところで、アンネコフがロシア文学史、思想史に名を残しているのにたいして、サゾーノフがほとんど忘れ去られてしまったのはなぜだろうか。その第一の理由は、アンネコフが有名な『文学的回想』や1870年代末に出された著作集といった形でまとまった仕事を残したのにくらべ、サゾーノフが新聞、雑誌に評論、雑報の類を書き散らすばかりで、一つのテーマのもとにまとまった形の仕事を残すことがなかったことがある。もちろん、彼もドストエフスキイの目に止まった『ニコライ皇帝に関する真実』（パリ、1854）といった小冊子や、政治的パンフレットの類を何冊か出しはしたが、後世にまで残るような著作を結局残さなかった。また、長く西欧で暮らしてロシアの作家、思想家についてロシア人に向けて書くことがほとんどなかったことも一因と考えられる。ロシアの文学者について反響を呼ぶような評論をいくつか発表していれば、多少なりとも文学史に名を残したにちがいない。[61]リャザーノフが前述の本を書いた約90年前、すでに「忘れられた革命家」[62]と書かれていて、リャザーノフの発掘したマルクスとの関係、サゾーノフのごく早い時期のマルクス評価も、ソビエト時代にサゾーノフの名を定着させるには至らなかった。これはリャザーノフが指摘したゲルツェンと対照的な「ナショナルなヘソの緒」から自由になったサゾーノフの歩みが、[63]一国社会主義を国是としたスターリン時代にそぐわぬものだったせいもあろう。またリャザーノフ自身、時の政治に左右されない厳正なマルクス・エンゲルス研究の姿勢を、体制のイデオローグとしてマルクスを利用しようとするスターリンに疎まれ、1932年に初代のマルクス・エンゲルス研究所所長の地位を追われて、シベリヤの地で流刑死した。そのため、その後彼のサゾーノフ研究にも表向きにはふれにくくなり、サゾーノフを公正に評価することを困難にしたようである。[64]ソビエト末期にはそうした制約はなくなったが、[65]ゲルツェンが語っ

---

[60] 『マルクス・エンゲルス全集』第14巻、大月書店、1964、377頁（1860年の『フォークト氏』収録の手紙）。

[61] じっさい近年チャアダーエフやツルゲーネフの研究書のなかで、サゾーノフがこの二人について書いた文章が好意的に紹介されている。この点については下記を参照。

Н.П.Генерарова, *И.С.Тургенев : Россия и Европа*, Санкт-Петербург, 2003, cc.209-218.

П.Я.Чаадаев, *Пол.собр.соч.и избранные письма*, T.2, M., 1991, cc.550-552.

[62] Д.Рязанов, *Указ.соч.*, c.31.

[63] Там же.

[64] ロシアの図書館からリャザーノフのマルクス研究書が撤去されたといわれ、『文学遺産』第42-43巻（1941年刊）、62巻（1955年刊）では、リャザーノフの研究を利用したサクーリンの本を示すことで代用している。また、優れた研究者として知られるЛ.ギンズブルグの1957年の『過去と思索』論にも彼に言及がない。さらに、『文学遺産』第42-43巻所収のБ.コズーミンによるサゾーノフについての解説文は、もっぱらサゾーノフに否定的で、引用

たように英仏独伊の四ヵ国語をよくし、[66]ポーランド、チェコ文学まで論じたサゾーノフの幅広い教養と批評眼を正しく評価することのできる識者を見出すことは、今日でも容易ではない。しかし、思えばマルクスとボードレールといえばマルクス主義と象徴主義という世紀末のロシアを襲う二大潮流の元に位置する人物である。この二人と同時に接触をもち、ごく早い時期に両者を天才と呼んで高く評価したサゾーノフは、多少おおげさにいえば、いわば世紀末のロシアの行方を萌芽的に体現した人物といえて、思想史的にも文学史的にも見逃せぬ存在である。本稿ではサゾーノフの西欧通信につき、ボードレール関係の記事を中心に報告したにとどまるが、彼の文学、思想、政治活動についてさらに総合的に評価される日のくることが期待される。

した1860年のマルクス宛手紙にふれずに、50年代後半以降のサゾーノフが保守化したと述べるなど，不自然なところがある。

[65] 1983年に刊行されたアンネンコフの『パリ書簡』の解説では、マルクスとアンネンコフの関係をはじめて明らかにしたリャザーノフの『カール・マルクスと1940年代のロシア人』に言及し、紹介している。また、近年刊行されたエイジェリマンの書では、サゾーノフの「万国博におけるロシアの地位」に肯定的に言及している。

П.В.Анненков, *Парижские письма*, М., 1983, с.465.

Натан Эйдельман, *Свободное слово Герцена*, М.,1999, с.39.

[66] А.И.Герцен, *Указ.соч.*, с.330. なお、W. シリボフスカによれば5ヶ国語でポーランド語もできたと推測される。